

国語

1

出典

〇・呂陵『へ人類学的放屁論のフィールド1』放屁という覚醒』へ3 荒野に風立ちて』(世織書房)

解答

問一 (1)ーイ (2)ーア (3)ーイ

問二 才

問三 イ

問四 ア

問五 オ・カ

問六 Iーエ IIーア IIIーウ

問七 ウ

問八 オ

問九 ア

解説

問二 才の「アフリカの……とらえられており」は第二段落第一文の内容に相当。「人間の文化的秩序は……押し潰され

てしまう」は第二段落第二・三文の内容に相当。「放屁は……行為である」は第一段落第三文の内容に相当。「反社会的存在である邪術師」は第四段落第一文にある。アは「アンチテーゼとしての『反自然』」が不適。第二段落には「アンチテーゼである反文化としての自然」とある。イは「『自然』を内部に呼び込む行為」が不適。ウは「邪術師」の定義が本文の内容に合致しない。エは「『人間の自然』が人間の都合本位の秩序を取り巻いて」が不適。

**問三** ここでの「人になる」とは、赤ん坊時代には身についていなかった（公衆の面前で放屁すべきではない）という規範を身につけ、文化的な存在になることを言っている。では、放屁をどのようにすればよいのかというと、第五段落に「しかるべき時に……無害な形での放屁」と述べられている。それができるようになるためには、「あの辺りの筋肉の……習得」が必要だというのである。以上の内容を捉えたイが最適。

**問四** アの「本来は……している」は、第十九段落の内容に相当。「糞便を……放置してしまつては」は、最終段落最終文にある「それ（糞便が一体どのカテゴリーに属するものなのか）がわからなければ」に相当。文末の「世界が、曖昧な隙間だらけのものにな」ということは、アの「世界の認識が成立しなくなる」と同義と考えてよい。

**問五** アは「乳を吐き戻してしまうため」が第十二段落の内容に合致しない。イは第十四段落最終文の内容に合致しない。また、本文では出臍の原因を「芋やバナナを食べるため」とは断定していない。ウは第十五段落の内容に合致しない。「赤ちゃんが自分でもびっくりして笑い出した」とある。エは第十六段落に「同郷の我が妻」とある。三浦梅園と同郷なのは著者ではなく著者の妻。オは第十八段落第一文の内容に合致。カは第二十段落の内容に合致。

**問七** 「公衆の面前で……『人間の自然』に反する」を言い換えると、（公衆の面前であらうとなかろうと、放屁は人間にとつて自然なものだ）となる。人間も生物であるからには体内にガスがたまり、それを体外に排出するのは自然現象であつて、しかたのないことである。しかし、規範はそれを認めておらず、「公衆の面前で……規範」を守った上で「しかるべき時に……無害な形での放屁」という文化的な行為が求められるのである。この内容を的確に捉えたウが最適。

問八 直前に「放屁が単に生理現象であるばかりでなく」とあるが、この内容に相当するのはア・オ。オは「生理現象」

を具体的に言い換えているだけなので、問題はない。さらに、その前の「この事実」が直前の「家族が幼子と……深めてくれる」の部分を示し示していることに着目する。アはこの指示内容の捉え方が誤り。

問九 直前に「両義性……を帯びた物として」とあるが、ここでの「両義性」を具体的に捉える。「人間から外側へと溢れ出てくる諸々の排出物」の例として「糞便」が挙げられているが、最終段落に「糞便は、……世界（の一部）であって且つ世界でなく、また今や自分であって且つ自分ではない」とある。つまり、もともと自分の体の中にありながら、それが体外に排出されると自分のものではなくなるというのである。このことをここでは「両義性」と言っており、その「両義性」が「人々の強い関心を引き付ける」ということ。このことを的確に押さえたアが最適。

## 2

### 出典

河合隼雄『〈物語と日本人の心〉コレクションⅡ物語を生きる——今は昔、昔は今』（岩波書店）

### 解答

問一 (1)ーウ (2)ーオ

問二 エ

問三 ア

問四 イ

問五 ウ

問六 ア

### 解説

問二 直前に「この世との『関係』を切断され」とある。エの「根無し草」とは『浮き草』のことで、しっかりしたより

どころをもたない物や人のたとえとして用いられる。

### 問三

傍線部(a)の例を挙げた第二段落の内容をまとめると、「コップに……知る」と「その花が単なる花でなくな」り、「少女に親しみを感じ、その母娘の間の感情が」伝わって「関係づけ」ができる。すると「誰かに話をしたくなる」のだが、その際に「話が少し変わ」ったり「つけ加え」られたりすることもある。この内容を的確に捉えたアが正解。イは後半の「物事と物事との……複製させる」が本文の内容と合致しない。

### 問四

直後の文から、傍線部(b)のようになった原因は「自然科学」の「普遍性」にあるということがわかる。「普遍」とは、すべてのものにあてはまることをいう。アの冒頭部分は「普遍性」についての説明が不適。また、第五段落後半に、この普遍性ゆえに「人間は科学の知によって……思い違いをした」とある。ウはこの内容を捉えていない。エは「誤解」の内容が本文とは異なる。さらに、第六段落に「このような思い違いをすることによって、……この世との『関係』を切断され」「私と私を取り巻く世界との関係が……わからず」という状態になったとある。オはこの内容が捉えられていない。

### 問五

直後にその理由として、「この人たちは、二人称の死に対する意味づけを知りたい」とある。ア・エ・オはこの内容が捉えられていない。イは「人類は二人称や……成功した」の部分が不適。そのようなことは本文には述べられていない。

### 問六

第四段落に、「光源氏」は物語について〈本当のことが語られることは少ないが、単なる事実を述べている（たとえば『日本紀』）よりも真実を伝えるものだ〉と述べているとある。その内容を、選択肢一文目で正確に押さえているものはア・イのみ。この二つの選択肢を見比べると二文目・三文目はほぼ同じ内容なので、四文目に注目する。イは「現代人が抱える心理的な問題」は物語によって解決できる、としているが、そのようなことは本文では述べられていない。本文冒頭にあるように、「物語の特性」のうち、『関係づける』はたらしきがこの文章のテーマである。その点を捉えたアが正解。

## 解答

問一 イ

問二 ア

問三 (b)―ウ (e)―オ

問四 オ

問五 オ

問六 イ

問七 (三)―オ (四)―イ (五)―エ

問八 (一) 1―ウ 2―ア 3―イ (二) 1―エ 2―オ 3―ウ

問九 オ

問十 イ

問十一 ウ

## 解説

問一 (1)は尊敬動詞で、動作主に対する敬意を表す。その動作主は、直後にある鞍負命婦を遣わしたのと同じ人物であり、帝である。また、次の段落を見てもわかるように鞍負命婦に尊敬語は使われていない。(2)は尊敬の補助動詞。この一文の初めに「やもめ住みなれど」とあり、ここから「亡くなった女性の母君」についての描写となる。よって、動作主、つまり敬意の対象は母君である。(3)は丁寧の補助動詞。聞き手である鞍負命婦への敬意を表す。(4)は尊敬の補助動詞。動作主は、直前の会話と同じく母君であり、彼女がそのまま敬意の対象である。(5)は謙譲の補助動詞。命婦が母君に帝の言葉を伝える場面。謙譲語は動作の相手への敬意を表すため、敬意の対象は母君である。

**問二** 「遣はす」は尊敬語で、靱負命婦を派遣した帝への敬意を表す。

**問三** (b) 「やがて」は、ここでは「そのまま」の意。「ながめ(ながむ)」は「物思いにふける」の意。

(e) 「ためらひ(ためらふ)」は、古文では「心をしずめる・気持ちをおさえる」という意味が現代で用いる意味とは異なるため、重要である。

**問四** 古今和歌集の歌は「闇の中での現実の逢瀬は、はっきりした夢と比べてもそれほどまさってはいないのだなあ」という意味。〴〵それほどまさってはいない〴〵ということとは「たいして変わらない」ということなので、ア・イ・オが残る。その歌に対して本文では傍線部(c)としているが、「闇の現」と比べているのは、亡くなった女性(桐壺更衣)の、「面影に……思さるる」「けはひ容貌」である。「面影に……思さるる」なのだから、いわば幻のようなもので、歌の中の「夢」に相当すると考えられる。その「夢」が「闇の現」に「劣り」とあるので、「夢」より「闇の現」のほうがよいということになる。その意味に最も近い解釈のオが正解。

**問五** 傍線部(d)中の「たまへ」は、下に動詞が接続する連用形であり、それが「たまへ」とエ段音になっていることから、下二段活用の「たまふ」(謙譲の補助動詞)と判断する。また、「参りては……やうになむ」と典侍が帝に奏上するのを聞いて、「もの思ひたまへ知らぬ心地にも、げにこそいと忍びがたう」と感じたのは、この会話の主である靱負命婦である。

**問六** 傍線部(f)を含む会話文は、命婦を介して伝えられた帝から母君への言葉。傍線部(f)の前にも「忍びては参りたまひなむや」とあるが、これは母君に参内を促す言葉である。愛する女性(桐壺更衣)を失った悲しさを分かち合える人がほしいから、というのである。そのあとで、「若宮の……過ぐしたまふも心苦し」いので「とく参りたまへ」と続くので、帝は母君と若宮の両方に参内を促していると考ええる。

**問七** (三) 終止形は「る」。「夢かとのみたどら(たどる)」の動作主は帝自身。心情を表す表現についていることから、オの自発である。ア・ウ・カでは不自然な訳になる。

(四) 直後の「やうに（やうなり）」は、もともと名詞「やう」に断定の助動詞「なり」が接続してできた助動詞なので、連体形に接続する。「ぬ」はイの打消の動詞「ず」の連体形。

(五) エの完了の助動詞「ぬ」の連体形。係助詞「なむ」の結び。

問八 (一) 「ず」をつけると「過ぐさず」となる。現代語の「過ごす」に同じ。

(二) 「ず」をつけると「たへず」となる。直後の「まじく（まじ）」は終止形接続の助動詞。

問九 波線部(X)は、このようなときは（夕月の美しいときは）の意なので、何をした（する）であろうであった（ある）に相当する述語（述部）に係ると考えられる。ア・イ・ウ・エはすべて、それぞれの直後の語を修飾しており、述部にはなりえない。オは単独で述語になっていて、夕月の美しいときは自然と思われなさる」と解釈できる。

問十 「門引き入るるより」は、車を門内に引き入るとすぐの意。「連体形＋より」の形で即時を表す。

問十一 波線部(Z)の直前に「かつは」とあり、「人も……御景色」だったのは帝である。帝が、人も（私を）心弱く見申し上げるだろう」と気にしている様子を、靱負命婦が「心苦し」く感じたのである。よって、心弱いのはウの帝である。

## 4

### 出典

『孟子』〈卷第十一〉下

### 解答

問一 (X)ーエ (Y)ーイ (Z)ーイ

問二 ウ

問三 ア

問四 イ

問五 エ

問六 エ  
問七 ア

解説

問一 (X) ぐもまた同様にぐ という意味を表す。

(Y) 「与」の読みとして考えられるのはア・イ・ウ。「之」は「弁」を教わっているもう一人を指す。その後の「俱ともに」を含めて、もう一人の者といっしょにぐの意と捉える。

(Z) そのあと「非」に返るが、「非」は否定を表し「(二) あらず」と読む。「二」は断定の助動詞「なり」の連用形にあたるので、「二」の直前はラ変動詞「然しかり」の連体形「然る」になる。

問二 「未」は再読文字で「いまダくず」と読む。二回目の読み「ず」がないイは不適。「能」が「不能」の形で用いられれば「あたはず」と読むが、単独で用いられている場合は「よク」と読む。よって、ウが正解。

問三 その前に孟子は植物の例を挙げている。芽を出しやすい植物があつて、一日それを日に当て暖めて、そのあと十日陰に置いて冷やしてしまつと、なかなか芽を出すことができない。それと同じように、自分がたまに王に会つて教えても（暖めても）、王のもとを退いてから、それを邪魔する者（せっかく暖めたのを冷やす者）がいるといふのである。傍線部(b)は「吾萌いかんすこと有るを如何せんや」と書き下し、私が芽生えさせたものをどうしようか、いやどうもできないぐの意。エの前半の内容は本文中にあるが、「王に能力が無い」とは述べられていない。

問四 「聴くことを為す」は聴くことをするぐの意。動作主は「其一人」。「聴」は注意深く耳を傾けるぐの意で、質問するといふ意味ではない。

問五 「将」は再読文字で「まさしく（ント）す」と読む。二回目の読み「す」は下から返つて読むが、イは「あらんとす」と読んでいたので、不適。

問六 問三の解説でも触れたように、孟子は二つのたとえ話をしている。一つは、せっかく暖められてもそのあと冷やさ

れてしまったら植物は芽を出せないという内容。もう一つは、囲碁の技術を習得できるかはそれに専心できるかどうかであつて、もともとの知能は関係がないという内容。邪魔が入らずそのことに専心することによつて、物事を習得することができるのだということを言っている。この内容を捉えたエが正解。

### 問七

「弗」は「不」に同じ。よつて「弗若」は「しかず」と読み、<sup>ゝ</sup>及ばない<sup>ゝ</sup>の意。二重傍線部は「是<sup>こ</sup>れ其の智の若<sup>し</sup>かざるが為<sup>ため</sup>か」と書き下す。